

# 『文学評論』 総目次

編集：竹内 栄美子

第1版：2026年3月17日

著者名	タイトル	ページ数	ジャンル
第1巻第1号 昭和9年（1934）3月創刊号 1日発行			
ルナチャールスキイ （昇曙夢訳）	ドストエーフスキイ 復活せば （芸術家及び思想家としてのドストエーフスキイ）	p2～14	
武田麟太郎	文芸時評	p15～19	創作月評
逸見広	二月同人雑誌評	p19～28	創作月評
亀井勝一郎	作家的良心の所在	p29～36	創作月評
	新刊紹介「飢」（創作集） 藤森成吉氏著	p28	
森山啓	創作理論に関する時評	p37～46	
上田進	海外作家評伝1（ソヴェト作家の巻）パンフヨーロフ ー小説「貧農組合」の作者ー	p47～51	
神近市子	血の不思議	p52～53	随筆
安田徳太郎	日露戦争	p53～55	随筆
徳永直	ゴルキーに関する断片ー「私の大学」をとほしてー	p56～60	
北川冬彦	寒駅にて眠つてしまつた人	p61～61	詩作品
萩原恭次郎	もうろくづきんーおやぢが家出をする。出稼ぎとは話が好すぎるー	p62～63	詩作品
上田進	ソヴェート文学ノオト	p64～68	
唐木順三	意慾の純粹性ー「書かれざる作品」を読んでー	p69～72	
平林たい子	反動期の作品	p73～74	
土方定一	リアリズム問題に寄せて	p75～78	
秋田雨雀	文学上の「同伴者」といふ意味について	p79～82	
藤森成吉	パンテレーエフその他	p82～85	
林房雄	詩篇（「青年」終篇の一節）	p86～97	創作
仲町貞子	新居	p98～115	創作

山田清三郎	試練の半生 長篇 (一)	p116~142	創作
	編輯後記		
<b>第1巻第2号 昭和9年 (1934) 4月特輯号 1日発行</b>			
(文責・徳永直)	巻頭言「創作技術に関する問題」の提唱	p2~3	
川口浩	否定的リアリズムについてープロレタリア文学の一方向	p4~13	
ペレヴェルゼフ (熊沢復六訳)	ゴーゴリの芸術と社会的環境	p14~26	
立野信之	ゴーゴリ私観	p27~32	
岡沢秀虎	ゴーゴリのリアリズム	p33~39	
林房雄	到遙家園一樹梅 (訳詩二篇)	p40~41	
上田進	海外作家評伝2 (ソヴェト作家の巻) ショーロホフ	p42~46	
山田清三郎	ナルプ最後の日に寄す	p46	
小幡義治	「麴麴」のことあれこれ	p47~49	同人雑誌内輪話 (1)
松田明	「コギト」のこと	p49~51	同人雑誌内輪話 (1)
	ソヴェト文学年表 一九一七年ー一九二〇年国内戦と戦時共産時代	p47~51	
鹿地亘	ナルプの解散について	p52~58	
林房雄	夜明前の仕事場ープロレタリア文学の新段階ー	p59~62	
保田与重郎	反動期の精神	p63~67	
徳田秋声 細田民樹 川端康成 宇野浩二 橋本英吉 窪川稲子 三好十郎 徳永直 江口渙 山田清三郎 細田源吉 藤森成吉	ナルプの解散に対する諸家の感想	p68~69	
神近市子	文芸時評	p70~77	創作月評
山田清三郎	同人雑誌の動向を探ぐるー三月の諸作品を通じてー	p77~86	創作月評
森山啓	「中央公論」 「新潮」 其他の作品について	p86~90	創作月評
村山知義	私の仕事	p91~92	隨筆・生活を語る

江口渙	昨今の私	p92～93	隨筆・生活を語る
阿蘇弘	私の抱負	p93～94	隨筆・生活を語る
橋本英吉	こちこちの現実	p94～95	隨筆・生活を語る
細田民樹	横光氏の『紋章』について	p96～97	
窪川鶴次郎	詩壇時評一詩におけるリアリズムの問題に就いて一	p98～103	
広津和郎	作家に聴く1 無性作家の創作談	p104～106	
徳永直	あるいて来た道（四）一僕の自叙伝一	p107～112	
中村光夫	作家としての自覚一「文学のために」読後感一	p113～118	
エム・ロゼンタール (広島定吉訳)	世界観と芸術創作方法	p119～128	
徳永直	島木健作君について	p129	
島木健作	癩	p130～170	創作
山田清三郎	試練の半生 長篇（二）	p171～190	創作
ゴーリキイ（平井肇訳）	伊太利物語	p191～204	創作
渡辺順三* *編輯後記については、（渡辺）と署名のある場合のみ、本誌編集人である渡辺順三の名前を記した。 （以下同様）	編輯後記	p205	

**第1巻第3号 昭和9年（1934）5月創作号 1日発行**

	プロレタリア文学を守れ（文学評論）	p2～3	
藤森成吉	阿呆	p4～17	創作六篇
橋本英吉	自然と人生について	p18～29	創作六篇
上田進	はげしい空	p30～51	創作六篇
堀田昇一	波の上	p52～67	創作六篇
窪川稲子	恐怖	p68～85	創作六篇
山田清三郎	試練の半生 長篇（三）	p86～111	創作六篇

徳永直	歩いて来た道（五）	p112～121	
林房雄	プロレタリア文学当面の諸問題	p122～128	
森山啓	「否定的リアリズム」の批判	p129～138	
亀井勝一郎	ありとあらゆる仮面の剝奪—窪川鶴次郎を駁す—	p139～145	
橋本英吉	技術問題について	p145	
柁不二夫	世界文学ノート アメリカ	p146～147	
徳永直	春さむし 「改造」「新潮」「経済往来」「文学評論」「文化集団」	p148～154	創作月評
三好十郎	未だ答へは否定的だ—同人雑誌四月号創作読後—	p155～162	創作月評
松田解子	「私の『黎明期』」「裸の街」「苛める」その他の作品に就て	p162～166	創作月評
高見順	川端康成評伝	p167～174	
上野壮夫	海は腹のそこに鳴る	p175～175	詩・作品
窪川鶴次郎	街頭の児おさと「里子にやられたおけい」 第三部（作曲のために）	p176～177	詩・作品
半谷三郎	豚と膏薬	p178～179	詩・作品
神保光太郎	鷺	p180～181	詩・作品
S・T 森山啓 渡辺順三 十字路 徳永直	六号雑記	p182～183	
窪川鶴次郎	詩壇時評—今日の動向—	p184～188	
ロゼンタール (広島定吉訳)	世界観と芸術創作方法（完）	p189～196	
榎本楠郎	賢婦ドストエフスキー夫人	p197～200	
渡辺順三	歌壇時評	p201～207	
藤森成吉	前号巻頭の提唱に対して	p201～202	技術問題の提唱について
秋田雨雀	創作技術の問題について	p202～203	技術問題の提唱について
江口渙	プロレタリア文学における技術の問題	p203～204	技術問題の提唱について
細田源吉	技術問題について	p204～205	技術問題の提唱について
細田民樹	徹底的に排撃すべきもの	p205～207	技術問題の提唱について
渡辺順三	編輯後記	p208	

第1巻第4号 昭和9年（1934）6月号 1日発行

	指導的理論の立後れについて（文学評論）	p2～3	
鈴木清	前夜	p4～36	創作五篇
松田解子	そだち	p37～60	創作五篇
平林たい子	繭	p61～68	創作五篇
藤島まき	いのち	p69～95	創作五篇
徳永直	「藤島まき」について	p95	
山田清三郎	試錬の半生 長篇（四）	p96～119	創作五篇
徳永直	歩いてきた道（六）	p120～127	
	新刊紹介「ヨーロッパ印象記」 藤森成吉著	p127	
宇野浩二	ロシア文学におけるゴオゴリ	p128～131	
ゴリキイ（広尾猛訳）	創作技術について	p132～138	
山沢種樹	「紀元」酔語	p139～141	同人雑誌内輪話（2）
渋川驍	「日曆」について	p142～143	同人雑誌内輪話（2）
	海外の文学サークルから	p139～143	
小熊秀雄	魅力あるものにしよう	p144～145	詩作品
松坂駿次郎	春の通信（散文詩） わが同志たちへの返信がはりに	p146～147	詩作品
沼田英一	リアリズム及びロマンチズム （プロ文学に於る新なる『想像』の強調、創作技術の発展の為に）	p148～162	
森山啓	沼田氏の論文について	p162	
保田与重郎	林房雄の「青年」について	p163～167	
	新刊紹介 長篇「青年」林房雄著	p167	
堀場正夫	二つの性格について	p168～169	
徳永直 Y・K 出雲寺 W・K生 X 渡辺順三 十字路 O・S	六号雑記	p170～171	
上田進	世界文学ノート ソ同盟における二三の問題	p172～177	

川口浩	森山君に答へる	p178~182	
大川澄夫	啄木の歌の形式について	p183~189	
林房雄	宛名のない手紙	p190~191	
森山啓	中傷的批評を排すー私的釈明を兼ねてー	p192~195	
	読者評壇創設について	p195	
青野季吉	作品評論断章	p196~200	創作月評
北川冬彦	同人雑誌（五月）の作品	p200~205	創作月評
窪川鶴次郎	文芸時評	p205~212	創作月評
	詩集「古き世界の上に」小野十三郎著	p212	新刊紹介
	「ゲーテ詩集」森山啓訳		新刊紹介
渡辺順三	編輯後記	p213	

**第1巻第5号 昭和9年（1934）7月号（夏期創作特輯） 1日発行**

〔付記〕 目次うちに「山田清三郎氏出版記念会」の写真がある。

	批評における図式主義の再発を防ぐ（文学評論）	p2~3	
平田小六	村の地主（「青春」第一部）	p4~22	特輯創作
島木健作	鯨漁場	p23~53	特輯創作
徳永直	私の「黎明期」	p54~89	特輯創作
ゴリキイ（広尾猛訳）	わが文学修業	p90~97	
森山啓	プロレタリア文学への一つの批評に対して	p98~102	
石井光	一枚の畳	p103~103	短歌
速水惣一郎	絃工の唄ー獄中の回想からー	p104~104	短歌
渡辺順三	故郷に帰りて	p105~105	短歌
黒田辰男訳	ソヴェト作家同盟の新規約決定	p106~108	
山田清三郎	六月二日の夜の感激 一本誌読者諸君への挨拶を兼ねてー	p109~115	
萩原恭次郎	夜の線路にて	p116~117	詩

黒川生 浅井光 須藤生 伊崎生 関英雄 鉄生 矢凧弘	読者評壇	p118~119	
鈴木清	「中央公論」「文藝」 其他を読む	p120~125	創作月評
金親清	六月の同人雑誌評	p126~131	創作月評
堀田昇一	「いのち」その他	p131~135	創作月評
藤森成吉	「斬られの仙太」劇について	p136~137	
高沖陽造	シェークスピアの芸術批判のためにー彼のリアリズムとその戯曲的構成ー	p138~148	
佐々木孝丸	ヨーロッパ印象記を読む	p149~151	
宮木喜久雄	作品批評の検討	p152~154	新進評論家に聴く
長谷川一郎	森山氏に理論的競争を提議する	p154~157	新進評論家に聴く
阿部秀夫	批評家の仕事	p158~159	新進評論家に聴く
伊藤永之介	果して文学に還つたか	p160~164	新進評論家に聴く
遠地輝武	新しい仕事を押進めるためにー新作家組織の必要についてー	p164~169	新進評論家に聴く
徳永直	ソヴェト芸術音画「国境の町」をみる	p170~170	
渡辺順三	編輯後記	p171	

**第1巻第6号 昭和9年（1934）8月号 1日発行**

藤森成吉 林房雄 中野重治 山田清三郎 窪川稲子 森山啓 平田小六 徳永直 大竹博吉 渡辺順三	『プロ文学の動向を聴く』座談会	p2~16	
土方定一	森鷗外と原田直二郎（明治文学史と明治美術史とのひとつの交流）	p17~27	
久坂栄二郎	新劇の「大同団結」の問題	p28~28	
上野壮夫	方向、言葉	p29~30	詩
後藤郁子	トタン屋根の下	p30~31	詩

坪野哲久	<small>じやのめそう</small> 蛇目草咲けども	p32～33	短歌
亀井勝一郎	批評以前ー森山啓氏らへ一言ー	p34～38	
藤森成吉	作品をよんで	p39～43	創作月評
渡辺順三	七月の同人雑誌を読む	p43～49	創作月評
森山啓	「私の黎明期」その他について	p50～56	創作月評
本庄陸男	批評への感想として	p58～60	新進作家の感想
島木健作	監獄、その他	p60～62	新進作家の感想
渋川驍	技術について	p63～66	新進作家の感想
仲町貞子	作家としての意見ー楽しかったときー	p66～68	新進作家の感想
金親清	批評に就ての雑感	p68～71	新進作家の感想
「文学評論」編集部	応募作品について	p71	
富田篤太郎 M生 一愛読者 矢尻弘 岡本生 甲斐洲二	読者評壇	p72～73	
細田民樹	水馬演習	p74～75	夏の隨筆
神近市子	海へのあこがれ	p75～77	夏の隨筆
藤森成吉	ベルリンの夏	p77～79	夏の隨筆
徳永直	しじみとり	p79～81	夏の隨筆
湯浅芳子	ソヴェト文学界の消息	p82～89	
Y W Z	シベリア横断旅行の話	p90～91	
徳永直 無名戦士 森山啓	六号雑記	p92～94	
藤島まき	<small>アカム</small> 赤剥け	p95～124	小説
阿蘇弘	待機	p125～141	小説
佐々木一夫	秋（「没落後」続篇）	p142～159	小説
渡辺順三	編輯後記	p160	

エヌ・マカリョフ	この水準を守れ！－「ひらかれた処女地」について－	p2～16	
編集部	「この水準を守れ！」について	p16	
山田清三郎	当面の問題について－僕はかう考へる－	p17～24	
鈴木清	雨・山祭り	p25～28	文学通信 村の生活・町の生活
安瀬利八郎	モラトリアム	p28～29	文学通信 村の生活・町の生活
佐々木一夫	村の風景	p30～31	文学通信 村の生活・町の生活
橋本英吉	水騒動記	p31～33	文学通信 村の生活・町の生活
徳永直	「太陽のない街」近況	p33～35	文学通信 村の生活・町の生活
	「村の生活、町の生活」原稿募集	p35	文学通信 村の生活・町の生活
湯浅芳子	ウクライナ作家大会その他－最近のソヴェト文学界－	p36～41	
立野信之	正宗白鳥論	p42～48	
フェリーチョ 石川正夫 VAN 種男 千代田愛三 S・K 矢尻弘 片桐且	読者評壇	p49～51	
	第一回原稿募集応募者	p52～53	
徳永直	歩いてきた道（七）	p54～59	
松田解子	ふるさと	p60～61	詩
館山しのぶ	ルンペン	p62～63	詩
渡辺順三	遠地輝武氏著「石川啄木の研究」について	p64	新刊紹介
田木襄	児童文学研究会編「現代童話集」に就て	p65	新刊紹介
上野壮夫	詩壇時評－散文詩型の問題など－	p66～72	
岩崎昶	「雷雨」に就いて	p73～75	
兼子慶雄	文芸映画の終焉	p76～77	
徳永直 森山啓 無名戦士	六号雑記	p78～79	
穴戸儀一	古典的レアリズムの精神	p80～88	
沼田英一	文学に於ける愛の問題	p89～91	
江口渙	文芸時評	p92～97	創作月評
亀井勝一郎	八月の同人雑誌評	p97～102	創作月評

武田麟太郎	作品雑評	p102～104	創作月評
窪川鶴次郎	新刊紹介 「短歌の諸問題」を手にして	p105	
藤森成吉	雨のあした（一幕）	p106～122	創作 戯曲
大谷藤子	加奈子	p123～145	創作 小説
渡辺順三	編輯後記	p146	

**第1巻第8号 昭和9年（1934）10月号 秋期倍大号 1日発行**

江口渙 徳永直 立野信之 中条百合子 川口浩 亀井勝一郎 窪川鶴次郎 森山啓 松田解子 渡辺順三	作品検討座談会	p2～23	
エヌ・マカリョフ （馬上義太郎訳）	この水準を守れ！（二）－「ひらかれた処女地」について－	p24～42	
中条百合子	近頃の感想	p43～49	
藤森成吉	答へる	p49	
徳永直	歩いてきた道（八）	p50～54	
山田清三郎	書簡（渡辺兄へ）	p54	
湯浅芳子	第一回全ソ作家大会開かるーゴリキイの大演説、その他ー	p55～59	
クラウス・マン グスターフ・レグレル フランツ・ウエイスコプ ルイ・アラゴン	外国作家の大会開会の印象	p56～58	
	第一回ソヴェト作家大会の決議	p60～60	
藤森成吉	周作人を招く	p61～61	
江口渙	日本プロレタリア文学の支那訳とその訳者	p62～68	

フェリーチョー ー農民 内田博 須藤作市郎 片桐且 星鉄朗	読者評壇	p62～68	
赤堀清太郎	葺き替へ	p69～71	文学通信 村の生活・町の生活
山田多賀市	追はれた友へ	p71～73	文学通信 村の生活・町の生活
高木光	無題	p73～75	文学通信 村の生活・町の生活
川俣末六	町の断片	p75～76	文学通信 村の生活・町の生活
黒田多賀吉	裏町の街路樹	p76～78	文学通信 村の生活・町の生活
大元清二郎	工場を戦場とおもへ	p78～79	文学通信 村の生活・町の生活
上野壮夫	詩壇時評ー批評の態度其の他ー	p80～85	
野崎韶夫	最近のソヴェト劇壇	p86～89	
鈴木亮	プロレタリア文学に於けるロマンチズムの問題（入選）	p90～95	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p96～97	
千兄子月	かまぐれのうた	p98～99	入選詩 六篇
新妻すぎ子	留置場の朝に	p99～100	入選詩 六篇
大元清二郎	死の刹那	p100	入選詩 六篇
萩原大助	<small>むち</small> 部落	p101～102	入選詩 六篇
内田博	死と眼と（逝ける常夫へ）	p102～103	入選詩 六篇
岩瀬一男	春風	p103	入選詩 六篇
丘令二	連結手の歌		短歌・選外佳作
竹越筍介	日影		短歌・選外佳作
寺島登久二	村落の歌		短歌・選外佳作
一条徹	石板に唄ふ		短歌・選外佳作
北川小枝	○		短歌・選外佳作
赤堀清太郎	○		短歌・選外佳作
赤木公平	飯屋の朝		短歌・選外佳作

城田晴一	留置場の落書		短歌・選外佳作
円城玲一	○		短歌・選外佳作
糸田千	○		短歌・選外佳作
村山知義	文芸時評	p106~112	創作月評
田辺耕一郎	新しい文学精神のために	p112~117	創作月評
窪川稲子	九月の作品	p117~120	創作月評
三好十郎	応募戯曲読後		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
村山知義	○		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
川口浩	評論選後評		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
窪川鶴次郎	予選を終へて		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
森山啓	選評		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
窪川鶴次郎	詩の選後評		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
北川冬彦	○		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
松田解子	選後に		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
森山啓	○		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
上野壮夫	経過その他		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
	選外佳作		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
窪川鶴次郎	短歌予選後の感想		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説

渡辺順三	短歌の選後に		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
中条百合子	小説の選を終へて		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
藤森成吉	予選作品		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
徳永直	選后感		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
亀井勝一郎	選後に		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
窪川稲子	予選評		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
	応募小説予選		第一回応募原稿選後評 戯曲、評論、詩、短歌、小説
	「周作人を招く」会 写真説明	p132	
無名戦士 T・S 十字路	寸感寸評	p134~135	
淡徳三郎	平竹伝三著 「ソヴェト連邦経済地理」	p136~137	新刊紹介
壺井繁治	窪川稲子著 「牡丹のある家」読后感	p137	新刊紹介
ゴリキイ	反動文学と社会主義文学—全ソ作家大会における演説の一節—	p138~144	
	長篇小説「山河」松村潔著	p144	新刊紹介
	「バルザック批判」マリイ・ボウル著 石川湧訳		新刊紹介
橋本英吉	炭坑（長篇）	p145~172	創作四篇
佐々木一夫	秋（「没落後」続篇）	p173~197	創作四篇
徳永直 中条百合子 武田麟太郎 亀井勝一郎 藤森成吉 窪川稲子	入選小説「新聞配達夫」について	p198	
楊達	新聞配達夫（入選第二作）	p199~233	創作四篇

中条百合子 徳永直 亀井勝一郎 藤森成吉 窪川稲子	入選小説「毒」について	p234	
木村清治	毒（入選第三作）	p235～260	創作四篇
渡辺順三	編輯後記	p261	
<b>第1巻第9号 昭和9年（1934）11月号 1日発行</b>			
船越清	文学と政治との統一	p2～14	
江口渙	細田民樹の「犬吠呷心中」を読む	p15～15	
片岡鉄兵	島木健作について	p16～18	
中野重治	イデオロギー的批評を望む	p18～20	
徳永直	纏らまぬこと二三	p20～24	
	長篇小説 「火山の下に」江口渙著	p24	新刊紹介
	「近代日本詩の史的展望」遠地輝武著		新刊紹介
瓜生元	雑魚と甘藷の村	p25～26	文学通信 村の生活・町の生活
三谷秀治	水害地通信	p26～27	文学通信 村の生活・町の生活
園檜嘉績	ごせがやける	p27～29	文学通信 村の生活・町の生活
鉄人	俺の町を語る	p29～30	文学通信 村の生活・町の生活
榎南謙一	風水害と赤帽少年	p30～32	文学通信 村の生活・町の生活
鶴彬	町の織物インフレと女工たち	p32～33	文学通信 村の生活・町の生活
沙和宋一	杉の木騒動	p33～35	文学通信 村の生活・町の生活
	選外 締切到着後		文学通信 村の生活・町の生活
編集部	投稿者諸君へ		文学通信 村の生活・町の生活
	応募規定		文学通信 村の生活・町の生活
VAN グルーチヨ フェリーチヨ 頼明弘 北村衛二 矢凧弘 内田博 田中達次郎 SK 片桐且	読者評壇	p36～39	

遠地輝武	白痴の歌	p40~42	詩作品
小熊秀雄	論争に就いて	p42~43	詩作品
永見達	車窓 道化 詩は地上を見はなさぬ	p44~45	詩作品
小坂たき子	「牡丹のある家」の会感想		二つの出版記念会
現実同人	「転形期の文学」の会		二つの出版記念会
堀場正夫	文章への不安	p48~52	
松田解子	新刊紹介 窪川稲子著「一婦人作家の隨想」を読む	p53~53	
徳永直	歩いて来た道 (九)	p54~64	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p66~67	
田野三平	文学評論	p68~69	
村山知義	新劇合同経過報告	p70~71	
	<写真>ソヴェート作家大会より	p72	
湯浅芳子	ソヴェート作家大会日記	p73~83	
ククルイニクスイ筆	漫画 (文学隊観兵式)	p78~79	
フヨードル・グラトコフ レオニード・レオーノフ フセワロード・イワーノフ セイフリオ ソボーレフ	ソ作家大会の討論演説断片	p84~85	
荘司重夫	「第三新生丸」後日譚 (入選三席) 一海上労働者の報告書一	p86~108	創作三篇
藤森成吉 中条百合子 窪川稲子 徳永直	「第三新生丸」後日譚について	p108	
橋本英吉	炭坑 (二)	p109~130	創作三篇
島木健作	医者	p131~162	創作三篇
渡辺順三	編輯後記	p163	

**第1巻第10号 昭和9年 (1934) 12月号 1日発行**

森山啓	一九三四年度の文学における諸問題	p2~13	一九三四年度文壇の回顧と批判
徳永直	三四年度に活動したプロ派の新人たち	p13~21	一九三四年度文壇の回顧と批判

中条百合子	本年度におけるブルジョア文学の動向	p22～36	一九三四年度文壇の回顧と批判
	林房雄氏出版記念会	p37	
鈴木清	暮れ近く	p38～39	師走のスケッチ
本庄陸男	きらめく雨滴	p39～41	師走のスケッチ
窪川稲子	ある大晦日	p41～43	師走のスケッチ
	新刊紹介 「現実主義詩論」 半谷三郎氏著「昭和新詩集」	p43	
速水惣一郎	北京の印象（一）	p44～45	短歌
槇本楠郎	青い囚衣	p46～46	短歌
武政杜郎	堂坊主の歌	p47～47	短歌
渡辺順三	凶作地帯	p48～48	短歌
石井光	秋深し	p49～49	短歌
湯浅芳子	全ソ作家大会日記（三）	p50～55	
秋田雨雀	作家大会に於けるマクシム・ゴーリキイ（文学通信）	p56～62	
徳永直	新刊紹介 「われらの成果」について	p63～63	
沼田英一	ロマンチズム論	p64～77	
矢部友衛	帝展寸評	p78～79	
栢野英夫	山村便り	p80～81	文学通信 村の生活・町の生活
福島和人	都会から	p81～83	文学通信 村の生活・町の生活
川俣末六	若きもの・その他	p83～85	文学通信 村の生活・町の生活
楊達	町のプロフィール	p85～86	文学通信 村の生活・町の生活
藤川すみ子	音響	p86～87	文学通信 村の生活・町の生活
古河正一	村の生活	p87～88	文学通信 村の生活・町の生活
旗敬介	食へない報告	p89～90	文学通信 村の生活・町の生活
	『村の生活・町の生活』選外	p90	文学通信 村の生活・町の生活
	締切後到着	p90	文学通信 村の生活・町の生活
	応募規定	p90	文学通信 村の生活・町の生活
上野壮夫	新刊紹介 「一九三四年詩集」によせて	p91～91	

松村恒二 鶴見軍一 田中達次郎 一農民 長田司 常土英 銘康雄 矢凧弘 片桐且	読者評壇	p92～95	
徳永直	歩いてきた道（十）	p98～103	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p104～105	
小熊秀雄	詩壇時評—プロ詩の昂揚期を迎へよ—	p106～111	
渡辺順三	三五年度に待望するもの—歌壇時評—	p112～118	
秋田雨雀	「現代ソヴェト演劇」を読む	p119～119	
八杉貞利 井田孝平 正宗白鳥 中野重治 沖野岩三郎 徳永直 上田進 八住利雄 H・T生 米川正夫 佐藤観次郎 横田瑞穂	ナウカ社版『ゴオゴリ全集』の完成によせて（1）	p120～121	
エヌ・マカリョフ （馬上義太郎訳）	この水準を守れ！（三）	p122～138	
橋本英吉	炭坑（三）	p141～162	創作三篇
大江賢次	熔鉱炉	p163～183	創作三篇
松田解子	行進図	p184～204	創作三篇
	編輯後記	p205	

本庄陸男 平田小六 島田和夫 沼田英一 永井街子 平林英子 松田解子 荒木巍 橋本正一 島木健作 徳永直 渡辺順三	三四年度の批判と三五年度への抱負 新人座談会	p2~22	
藤森成吉	新刊紹介 「新露西亞風土記」をよむ	p23~23	
エヌ・マカリョフ (馬上義太郎訳)	この水準を守れ! (三)	p24~37	
藤森成吉	二つの問題	p38~43	
梶不二夫	世界文学ノート ジョン・リード・クラブの第二回全国大会	p44~47	
秋田雨雀	春を告ぐるモスクワ河の流水	p48~51	
渡辺順三	三河島町風景	p51~51	短歌
小野十三郎	木津川農林倉庫	p52~52	詩
原勝	中国革命と女流作家丁玲	p53~57	
沼田英一	ロマンチズム論 (承前)	p58~69	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p70~71	
阿部秀夫	文芸時評	p72~76	
神畑勇	小説「土」の階級性	p77~83	
山田俊一郎訳	モスクワ通信 一九三四年のソヴェト文壇及び劇壇	p84~89	
	「第一回全ソ作家大会報告」を読みてー諸家の感想ー	p90~98	
平林たい子	二つの点について	p90~91	「第一回全ソ作家大会報告」 を読みてー諸家の感想ー
坂井徳三	われ等への教訓	p91~92	「第一回全ソ作家大会報告」 を読みてー諸家の感想ー
阿部秀夫	「全ソ作家大会」に就て	p92~94	「第一回全ソ作家大会報告」 を読みてー諸家の感想ー

槇本楠郎	昂奮・羨望・自重・希望	p94～95	「第一回全ソ作家大会報告」 を讀みて―諸家の感想―
長谷川一郎	我国にも児童文学を	p95～96	「第一回全ソ作家大会報告」 を讀みて―諸家の感想―
壺井繁治	全ソ作家大会に就て	p97～98	「第一回全ソ作家大会報告」 を讀みて―諸家の感想―
森山啓	自分への言葉	p98～98	「第一回全ソ作家大会報告」 を讀みて―諸家の感想―
荏原一 グルーチヨ 一教師 常井直正 矢尻弘 竹内徹 澄江宏 K・S	読者評壇	p90～98	
広尾猛	世界文豪評伝（一） マクシム・ゴリキイ	p99～103	
呂赫若	牛車	p107～136	創作五篇
徳永直	スケッチ三題	p137～152	創作五篇
平林英子	一つの典型	p153～167	創作五篇
片岡鉄兵	回顧	p168～171	創作五篇
島田和夫	四壁暗けれど	p172～193	創作五篇
渡辺順三	編輯後記	p194	

**第2巻第2号 昭和10年（1935）2月号 1日発行**

プドフキン (馬上義太郎訳)	特別寄稿 演劇と映画	p2～8	
戸坂潤	シエストフ的現象に就いて	p9～16	
阿部秀夫	ロマンチシズムに関する問題に就いて	p17～25	
エヌ・マカリョフ (馬上義太郎訳)	この水準を守れ！（完）	p26～34	
土方定一	その後のドイツ・プロレタリア文学	p35～37	
葉山嘉樹	山村に住みて	p38～41	

新井徹	詩壇時評	p42～47	
波立一	芥溜の都よ	p48～49	詩作品
杉沼秀七	凶作地	p49～50	詩作品
森谷茂	凶作地を救へ	p50～51	詩作品
永見達	自然詩抄（一） 山のかなたの町へ	p51～51	詩作品
渡辺順三	東北凶作地巡回記（岩手県の部）	p52～63	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p64～65	
ゴリキイ（広尾猛訳）	若き作家たちに与ふー「わが文学修業」よりー	p66～76	
北川静雄	レーニンのトルストイ評について	p77～79	
金声雨	牛の飼料	p80～82	文学通信 村の生活・町の生活
伊沢信平	根の白石村	p82～86	文学通信 村の生活・町の生活
藤島まき	変態景気の街	p86～87	文学通信 村の生活・町の生活
徳永直	まづこんなことをやりたい（回答）	p88～89	
中野重治 北川冬彦 森田綾夫 舟橋聖一 橋本正一 島田和夫 木寺黎二 矢崎弾 沼田英一	「全ソ作家大会報告」読后感ー諸家の回答ー	p90～91	
窪川鶴次郎	一九三五年度プロレタリア文学の展望に関して	p92～102	
壺井繁治	文芸時評	p103～107	創作月評
福田晴子	新年号創作批評	p108～112	創作月評
中条百合子	新年号の「文学評論」その他	p112～119	創作月評
貴司山治	青服	p122～150	小説
沙和宋一	底流	p151～159	小説
竹内昌平	早苗君の給料	p160～165	小説
安瀬利八郎	長男	p166～194	小説
渡辺順三	編輯後記	p195	

第2巻第3号 昭和10年（1935）3月号（1周年記念特輯） 1日発行

立野信之	流れ（長篇）	p2～21	
細野孝二郎	楽園の片隅	p22～52	小説
貴司山治	青服	p53～73	小説
ゴリキイ	社会主義的リアリズムについて	p74～78	
山村房次	作家大会後のソヴェト文学界	p80～85	
	消息 高倉輝氏の歓迎会、弘前「創作の会」の「スケッチ競争」、 「労働雑誌」の創刊、転居一束、中野大次郎氏遺稿集刊行会	p85	
秋田雨雀	五十年生活年譜 ヘビヤン時代（VI）（大正十三年～昭和元年）	p86～95	
橋本英吉	跛行的リアリズム—文芸時評—	p96～102	創作月評
大下晋平	「行動」「新潮」「文藝」その他	p103～109	創作月評
島木健作	雑感	p110～112	
川口浩	レニンとロマンチズム—ノートから—	p112～115	
阿部秀夫	ロマンチズムに関する問題に就いて	p116～121	
松田解子	ザール人民投票	p122～123	詩
坪野哲久	冬枯れを歩む	p124～125	短歌
赤木公平	夜の感情	p125～126	短歌
渡辺順三	拍手の波—全農青森県連新城地区大会を傍聴して—	p126～127	短歌
速水惣一郎	国境の町・護符	p127～128	短歌
三島明 郭天留 佐川千太郎 大久保朝臣 一農民 竹内次郎	読者評壇	p129～133	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p134～135	
徳永直	東北凶作地巡回記（青森県の部）	p136～147	
	「町の生活・村の生活」選後報告	p147	
中野重治	三つの問題についての感想	p148～168	
徳永直	「奇傑パンチヨ」を観る—近頃の興味ある映画—	p169～169	

森山啓	社会主義的リアリズムの「批判」	p170～173	
鈴木清	逃亡の時期	p174～175	農村通信
阿蘇弘	恋瀬村より	p175～177	農村通信
佐々木一夫	納税断行	p177～178	農村通信
橋本英吉	農民の不安	p178～179	農村通信
クヅミツチ（竹内次郎訳）	書きはじめの作家への手紙	p174～177	
池田寿夫	獄中通信	p177～179	
糸岡研三	鷲尾山と密漁	p180～181	文学通信 村の生活・町的生活
小名木綱夫	施料病院から	p181～183	文学通信 村の生活・町的生活
前田進	足袋の町から	p183～184	文学通信 村の生活・町的生活
熊王徳平	養蚕で生きる村	p184～186	文学通信 村の生活・町的生活
高木光	何処へ行く	p186～187	文学通信 村の生活・町的生活
高木央	見台開き	p187～189	文学通信 村の生活・町的生活
森山啓	新刊紹介 山田清三郎著「地上に待つもの」 高沖陽造著「欧州文芸の歴史的展望」	p192	
藤森成吉	「東洋の宝玉」	p194～197	特集 東京の一日
貴司山治	株式取引所の一時間	p197～201	特集 東京の一日
本庄陸男	省線お茶の水駅	p201～204	特集 東京の一日
細野孝二郎	労働市場風景	p204～207	特集 東京の一日
松田解子	デパート	p208～211	特集 東京の一日
上野壮夫	新聞社—散文詩風に—	p211～215	特集 東京の一日
島田和夫	荒川南岸を往く	p215～219	特集 東京の一日
壺井繁治	曇りの日の市ヶ谷	p219～222	特集 東京の一日
窪川稲子	沼の中の町	p222～225	特集 東京の一日
窪川鶴次郎	沈黙の鶴見闘争史	p226～231	特集 東京の一日
中条百合子	東京へ近づく一時間	p231～234	特集 東京の一日
渡辺順三	編輯後記	p235	

第2巻第4号 昭和10年（1935）4月号 1日発行

藤島まき	汚辱の中	p2～31	創作三篇
湯浅克衛	カンナニ	p32～61	創作三篇
立野信之	流れ（長篇第二回）	p62～85	創作三篇
ゴリキイ（山村房次訳）	文芸放談	p86～90	
	第二回原稿募集	p91	
小堀甚二	社会主義リアリズムの概念規定とわが国プロレタリア文学の基本的創作方法—かたはら森山、中野両説批判—	p92～99	社会主義的リアリズムの再検討（一）
森山啓	プロレタリア・リアリズムと「社会主義的リアリズム」—文学方法についての研究（一）—	p100～107	社会主義的リアリズムの再検討（一）
岡本潤	落葉	p108～108	詩
西一夫	東京湾	p108～109	詩
大道寺浩一	火を吐く闇	p109～110	詩
縄田林藏	大島町の春	p110～111	詩
山下昌作訳	ゴリキイからチエホフへの手紙〔ゴリキイのチエホフ評〕（「プラウダ」より）	p112～115	
佐々木一夫	雑感—文評三月号のなかで—	p116～117	批判と主張
竹内徹	—一つの不満—窪川鶴次郎氏に—	p117～118	批判と主張
飯田正	橋本氏の時評に対する雑感	p118～119	批判と主張
竹内次郎	スケッチについて	p119～121	批判と主張
赤堀清太郎	詩と短歌	p121～121	批判と主張
貴司山治	小林多喜二との最終の対談	p122～125	
高倉輝	批評について	p126～130	
遠地輝武	詩壇時評 インテリгент詩人のことなど	p131～136	
	「文学古典の再認識」芸術遺産研究会編		新刊紹介
	「島を愛した男」宮西豊逸氏訳		新刊紹介
	「エレホン」山本政喜氏訳		新刊紹介

	詩集「生活の灯」羽田貞氏著	p136	新刊紹介
徳永直	小説勉強（一）	p137～143	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p144～145	
柁不二夫	アメリカ作家大会	p146～147	
片岡鉄兵	創作時評	p148～150	
徳永直	東北凶作地巡回記（青森県の部2）	p152～159	
	原稿募集 A「村の生活・町の生活」 B「批判と主張」	p159	
杉沼秀七	林檎袋によせて	p160～162	文学通信 村の生活・町の生活
谷英三	工場の休憩	p162～165	文学通信 村の生活・町の生活
竹内次郎	歳末の新聞工場	p165～167	文学通信 村の生活・町の生活
小林安比古	建国祭	p167～170	文学通信 村の生活・町の生活
	獄中通信 山田清三郎 鹿地亘	p160～170	
立野信之	「長篇小説刊行会」の提案	p170～170	
渡辺順三	編輯後記	p171	

## 第2巻第5号 昭和10年（1935）5月号 1日発行

竹内昌平	書記	p2～46	創作三篇
藤島まき	汚辱の中	p47～73	創作三篇
立野信之	流れ（長篇第三回）	p74～88	創作三篇
久保栄	社会主義リアリズムと反資本主義リアリズム —前者の中野・森山的歪曲に対して—	p89～102	社会主義的リアリズムの再検討（二）
森山啓	中条の『乳房』、その他—創作方法についての研究の二—	p103～110	社会主義的リアリズムの再検討（二）
秋田雨雀	五十年生活年譜 ソヴェート旅行時代（其一）（昭和二年～三年）	p111～117	
葉山嘉樹	二重に搾られる一景（コムト）	p118～120	
小林多喜二	吹雪いた夜の感想（遺稿）—「復活」の逆立ち—	p121～123	
藤森成吉	小林多喜二のこと	p124～125	
山野千衛	小林多喜二を回顧する	p125～128	
土方定一	ドイツ文学通信	p129～131	

加藤悦郎	カリカチュア (1) 徳永直 (2) 中野重治	p132~133	
徳永直	小説勉強 (二)	p134~145	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p146~147	
仙崎三郎	谷崎「文章読本」についてー認識と人生ー	p148~152	
佐田四郎	現代総合美術展覧会批判ー自己批判と併せてー	p153~155	
ブハーリン (江口渙訳)	資本主義文化の危機	p156~161	
沼沢亮一	小堀甚二氏への感想	p162~163	批判と主張
楊達	お上品な芸術観を排す	p163~165	批判と主張
岐東弘志	長篇小説の批評を望む	p165~166	批判と主張
石川正夫	現実について	p166~168	批判と主張
芹沢常三	ギリシヤ芸術について	p168~170	批判と主張
	『批判と主張』選外	p170	批判と主張
岸本信吉	坪内逍遙と文学革命ー『小説神髓』を中心としてー	p171~177	
坪野哲久	プロレタリア短歌に関する若干の感想	p178~182	
貴司山治	旧「小林多喜二全集刊行会」の会員・寄附者たりし人々へ	p182~182	
貴司山治	小林多喜二の手紙を持ってゐる人々への願ひ	p182~182	
水村宏一	ソヴェト文学当面の重要問題 (一)	p183~187	
金親清	わが故郷の一端を語る	p188~189	
	古い新しい話 (一) 憎まれたトルスイト 飢饉とトルスイト	p189~189	
中野重治	戦争と文学ー漫評的月評ー	p190~197	
	詩集 「砂漠の歌」雷石楡著		新刊紹介
	詩集 「兄の最後の手紙」北沢喜代治著		新刊紹介
ミューレン (榎本楠郎訳)	童話 ミユエザン	p198~203	
	獄中通信	p204~207	
山村房次訳	社会主義的リアリズムについてーリト・クリテイク社説よりー	p208~212	
ミハイル・シュネイデル (馬上義太郎訳)	創作映画脚本論	p213~226	
渡辺順三	編輯後記	p227	

第2巻第6号 昭和10年（1935）「臨時増刊号」新人推薦号 1日発行

李北鳴*	初陣	p2～25	創作
*次号の作者名の訂正記事に基づいて正しい作者名を記した。			
浅井花子	ある夫婦	p26～45	創作
杉沼秀七	窓	p46～47	評論（詩）
雷石楡	細雨	p47～47	評論（詩）
香木直之	紙芝居（託児所の内）	p48～68	創作
大元清二郎	貧民窟	p69～86	創作
渡辺寛	詫びる	p87～103	創作
上島清	ハイネに捧ぐ	p104～104	評論（詩）
鈴木泰治	河端三章	p104～105	評論（詩）
井上健次	情勢	p106～122	創作
桂龍三	小林多喜二論	p123～137	評論
船方一	河	p138～139	評論（詩）
関直夫	わが妻に	p139～139	評論（詩）
森谷茂	個性の問題と島木健作論	p140～151	評論
銘康雄	<sup>ムラ</sup> 部落の一年	p152～153	評論（詩）
鈴木亮	認識。世界観の発展と芸術上のリアリズム及びロマンチズムの関係	p154～167	評論
島木健作	「初陣」について	p168～169	推薦の言葉
村山知義	推薦辞	p169～170	推薦の言葉
徳永直	香木直之について	p170～170	推薦の言葉
貴司山治	大元清二郎君について	p170～171	推薦の言葉
徳永直	渡辺寛について	p171～171	推薦の言葉
窪川鶴次郎	労働者作家と「情勢」	p171～173	推薦の言葉
森山啓	桂龍三の「小林多喜二」論について	p173～173	推薦の言葉
窪川鶴次郎	森谷茂と鈴木亮について	p173～176	推薦の言葉

	編集部より	p176	推薦の言葉
渡辺順三	編輯後記	p177	
<b>第2巻第7号 昭和10年（1935）6月号 1日発行</b>			
葉山嘉樹	人間の値段	p2～19	創作五篇
本庄陸男	けむり	p20～42	創作五篇
打木村治	喉仏	p43～72	創作五篇
立野信之	流れ（長篇第四回）	p73～93	創作五篇
平田小六	青春－「村の地主」後篇－	p94～113	創作五篇
森山啓	反対論者達に答へる－生活、世界観、方法（承前）－	p114～125	社会主義リアリズムの再検討（三）
金斗鎔	社会主義的リアリズムか×××リアリズムか	p126～136	社会主義リアリズムの再検討（三）
山村房次訳	社会主義的リアリズムについて（承前）－リト・クリテイク社説より－	p137～139	
加藤悦郎	カリカチュア（3）森山啓（4）本庄陸男	p140～141	
戸坂潤	文学に於ける偶然性と必然性	p142～146	
「文評」編集部	「文学評論」一周年記念 ソヴェト映画とレコードの夕	p147	
片岡鉄兵	新人六氏を扶る	p148～153	
後藤順一郎	徒弟工等	p154～156	文学通信 村の生活・町の生活
糸岡研三	畳表の産地より	p156～158	文学通信 村の生活・町の生活
赤松辰平	最初の一步	p158～159	文学通信 村の生活・町の生活
三谷秀治	小作四反	p159～160	文学通信 村の生活・町の生活
福島和人	飢餓地区レポート	p160～162	文学通信 村の生活・町の生活
	「村の生活・町の生活」選外佳作	p162	文学通信 村の生活・町の生活
	「美術評論」望月百合子訳	p162	新刊紹介
	長篇「環境と血」荒木精之著		新刊紹介
徳永直	小説勉強（三）	p163～174	
	「批判と主張」の投稿家諸氏に	p174	
山岸又一	一つの報告－大阪通信－	p175～179	

壺井繁治	ある街角にて	p180~181	詩
金子光晴	泡	p181~183	詩
唯物亭弁証坊	遠視近視	p184~185	
島田和夫	核心を衝けー素朴な感想ー	p186~188	
貴司山治	徳永君への手紙 「実録文学」とは「文学卑俗化論」乃至は「イデオロギーに水を割る」ことにはあらず	p189~191	
山野千衛	小林多喜二を回顧する (二)	p192~196	
ブハーリン (江口渙訳)	資本主義文化の危機 (承前)	p197~201	
小田二郎	ソヴェート同盟に於ける児童芸術教育の現状	p202~204	
柁不二夫	マクス・イーストマンの芸術論	p205~207	
水村宏一	ソヴェート文学当面の重要問題 (二)	p208~211	
鈴木清	新しきタイプの創造へー忽卒な覚え書ー	p212~221	
	古い新しい話 (三) なくなつたユーゴオの原稿	p221~221	
	新刊紹介 中野重治訳「レーニンのゴオリキーへの手紙」	p221	
秋田雨雀	五十年生活年譜 VIIIソヴェート旅行時代 (其二) (昭和二年~三年)	p222~228	
李朝民	朝鮮文壇の現状ー紹介のための走り書きー	p229~231	
ミュレーン (槇本楠郎訳*) *本文、目次に訳者名は書かれていないが、「承前」とあるので前号と同じ翻訳者を記した。	童話 ミユエザン (承前)	p232~239	
渡辺順三	編輯後記	p240	
<b>第2巻第8号 昭和10年 (1935) 7月号 1日発行</b>			
金親清	習志野つゞき	p2~26	創作三篇
里村欣三	苦力監督の手記	p27~58	創作三篇
立野信之	流れ (第五回)	p59~78	創作三篇

ゲ・レベデフ (馬上義太郎訳)	ソヴェト文学に現れたる個性と典型	p79~87	
中野重治	きれぎれの感想 (文芸時評)	p88~95	
中野重治	今村恒夫君の病気につきお願い	p95	
松本克平	大ざつばな感想	p96~97	最近の新劇運動批判
渡辺寛	脚本を中心に	p97~98	最近の新劇運動批判
鷺崎宏	希望	p98~99	最近の新劇運動批判
中村雅男	二つの堡壘	p99~100	最近の新劇運動批判
小松清	行動主義とプロレタリア文学	p101~107	
	文壇茶呑話	p108~109	
梶不二夫	アメリカ作家同盟の成立	p110~115	
	新刊紹介 長篇小説「少年」林房雄・阿蘇弘共著	p115	
山田清三郎	千葉だより	p116~118	
壺井繁治	新刊紹介 「冬を越す蕾」を読んで	p119~119	
本庄陸男	作家と世界観	p120~123	
唯物亭弁証法	遠視近視	p124~125	
三波利夫	最近のプロ文学に就ての感想	p126~129	
村山知義	「銀座八丁」を読む	p130~133	
新井徹	夕餐の卓で一上山草人帰朝の日一	p134~135	詩
小熊秀雄	風の中へ歌をおくる	p135~136	詩
永見達	島の夜をあゆむ	p137~138	詩
徳永直	小説勉強 (四) 一三たび文学大衆化について一	p139~149	
小名木綱夫	労働者と漢字	p150~151	批判と主張
雁田六助	文壇の流行に就て	p152~153	批判と主張
赤堀清太郎	本が読めない	p153~154	批判と主張
藤田篤磨	プロレタリア作家の生活とその創作 (徳永直を中心に)	p155~156	批判と主張
高橋新吉	新刊紹介 創作集「北方」を評す	p157~157	
山野千衛	小林多喜二を回顧する (三)	p158~163	

木寺黎二	「純粹小説」と自意識の問題—新しいロマンの精神にふれて—	p164～171	
布施辰治	懸賞地獄と審査の鬼—稀少の入選率に悩む新人の為に—	p172～175	
加藤悦郎	カリカチュア (5) 島木健作 (6) 湯浅克衛	p176～177	
川口浩	社会主義的リアリズムの擁護	p178～185	社会主義的リアリズムの再検討 (四)
島田和夫	「文学建設」の解散について —社会主義的リアリズムの論争の仕方にもふれて—	p186～192	
矢田進	「新官制」をあばく—美術界は何処へ行く—	p193～195	
玉城肇	明治の社会小説と家族問題	p196～205	
高倉輝	糞の話	p206～209	随筆
湯浅克衛	元山の夏	p209～213	随筆
最上二郎	ヴィクトル・ユーゴーについて	p214～218	
渡辺順三	時代の子達	p218～218	
窪川鶴次郎	月評的感想—才能、階級性のことなど—	p219～224	創作月評
荒木巍	最近の同人雑誌の中から	p224～228	創作月評
秋田雨雀	五十年生活年譜 IX 国際文化時代 (昭和三年～四年)	p229～235	
鶴彬	もがれた片側 (川柳)	p235～235	
エム・クリヴィツキイ	二つの「労働」の話 (1)	p236～241	
	第二回原稿応募者氏名	p242～244	
渡辺順三	編輯後記	p245	

**第2巻第9号 昭和10年 (1935) 8月詩特輯号 1日発行**

森山啓	父親しるす	p2～4	特輯詩篇
壺井繁治	五月の風に寄せて	p4～6	特輯詩篇
上野壮夫	濁つた河は音もなく	p6～6	特輯詩篇
萩原恭次郎	彼方	p7～7	特輯詩篇
草野心平	天の饗宴	p8～10	特輯詩篇
松田解子	辛抱づよいものへ	p10～11	特輯詩篇

後藤郁子	最初の、最後の女として	p11~12	特輯詩篇
北川冬彦	ゴミ溜の山 ある日、又	p12~13	特輯詩篇
窪川鶴次郎	涼台のメエルヒェン 狐の人形遊び、闇の中から戦士は語る—防空演習のこと	p13~15	特輯詩篇
ゴリキイ (丸目秋一訳)	詩のテーマについて	p16~22	
亀井勝一郎	文芸時評	p23~31	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p32~33	
貴司山治	文学大衆化問題の再三提起 (一) 徳永君の二三の見解を駁す	p34~41	
萩原中	文学における諸家の偶然論—偶然の重要性とその限界—	p42~51	
芥巖太郎	映画時評 陽気な連中 花嫁学校 春琴抄	p52~53	
大川澄夫	歌集「世紀の旗」を評す	p54~58	
飯田正	労働市場より	p59~60	文学通信 村の生活・町の生活
後藤順一郎	鉄工所風景	p60~62	文学通信 村の生活・町の生活
熊王徳平	春蚕通信	p62~64	文学通信 村の生活・町の生活
井上きよ子	小機業地帯から	p64~66	文学通信 村の生活・町の生活
	「村の生活・町の生活」選外	p66	文学通信 村の生活・町の生活
「文学評論」編集部	九州、関西地方の豪雨、水害、静岡地方の大地震について	p66	
	二つの出版記念会	p67~67	
田辺耕一郎	意慾の再建とリアリズムの変革	p68~75	
平林彪吾	思ひ出してつけた日記	p76~77	随筆
河野さくら	差入ノートより	p78~79	随筆
徳保秋人	現俳壇の動向—所謂新興俳句の問題—	p80~83	
土方定一	ドイツ文学通信 キツシユ生誕五十年 ハイリヒ・マン	p84~87	
藤島まき	判りきつた疑問	p88~91	
立野信之 橋本英吉 平田小六 金親清	ハガキ便り	p91~91	
徳永直	「炭坑」の表現と構成について	p92~97	相互批評

橋本英吉	「黎明期」を読みて	p97～101	相互批評
小熊秀雄	詩集「潮流」刊行祝賀文	p101～104	相互批評
森山啓	小熊秀雄についての漫語－「飛ぶ櫓」及び「小熊秀雄詩集」を読む－	p104～109	相互批評
竹内次郎生	ハガキ便り	p109	
編集部	第二回原稿応募者名訂正	p109	
	文壇茶呑み話	p110～111	
金親清	森山啓の「文学論」を推す	p112～113	ブック・レビュー
戸坂潤	アンシクロペヂストとしての岡邦雄氏「新アンシクロペヂスト」の紹介	p113～116	ブック・レビュー
梶不二夫	高垣松雄氏著『現代アメリカ文学』	p116～117	ブック・レビュー
	今村恒夫君の病気につきお願い	p117	
中野重治	文芸統制の問題について	p118～126	
	原稿募集	p127	
加藤悦郎	カリカチュア 小熊秀雄 松田解子	p128～129	
細田民樹	シヤポワロフのやうな人 今野大力君のこと	p130～131	追悼 今野大力
細田源吉	彼の死	p131～132	追悼 今野大力
黒島伝治	今野大力の思ひ出	p132～134	追悼 今野大力
小熊秀雄	北海道時代の今野大力－弱い子よ、書けずにみた子よ－	p134～136	追悼 今野大力
窪川稲子	今野さんを憶ふ	p136～137	追悼 今野大力
	今野大力氏逝去	p137	追悼 今野大力
立野信之	流れ（第六回）	p138～159	創作
上田広	オンドル夜話－ある男の話－	p160～185	創作
渡辺順三	編輯後記	p186	

## 第2巻第10号 昭和10年（1935）9月号 1日発行

三好十郎	幽霊荘（三幕四場）	p2～63	創作 戯曲
佐々木一夫	台湾行	p64～86	創作 小説
ゲ・レベデフ （馬上義太郎訳）	ソヴェト文学に現れたる個性と典型（二）	p87～94	

秋田雨雀	五十年生活年譜 X 文化闘争と逆流時代（昭和五年～六年）	p95～101	
坪野哲久	海猫に寄せて	p102～103	短歌作品
萩原大助	春蚕、雨	p103～104	短歌作品
大川澄夫	馬糞の町から	p104～104	短歌作品
山田清三郎	千葉より	p104～105	短歌作品
矢代東村	工場地帯	p105～105	短歌作品
高倉テル	文学当面の問題（文芸時評）	p106～115	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p116～117	
林房雄	作家クラブのこと プロレタリア作家の再団結	p118～119	
徳永直	スポーツについて	p120～122	
相馬泰三	農村に於ける階級構成と農民の心理—シヨーロホフの「ひらかれた処女地」 並びにパンフヨーロフの「或るコンミューンの悲劇」その他を読む—	p123～132	
橋本英吉	二つの事柄についての感想	p133～137	
上司小剣 林房雄 細田民樹 中河与一 岡邦雄 近松秋江 戸坂潤 江口渙 葉山嘉樹 佚名氏 秋田雨雀 小松清 森山啓	「文芸統制」をどう見る？—諸家の回答—	p138～139	
加藤悦郎	カリカチュア 窪川鶴次郎 窪川稲子	p140～141	
丸山義二	文芸懇話会賞が決定するまで—徳田秋声氏との一問一答—	p142～145	
	詩雑誌「太鼓」の創刊	p145	
	今村恒夫君の病気につきお願い	p145	
	文壇茶呑み話	p146～147	
沙和宋一	新「文学サークル」の自主的創造—津軽地方状勢報告—	p148～151	
	新刊紹介 「馬で去つた女」宮西豊逸訳	p151	
佐田四郎	胸像制作週間	p152～153	
芥巖太郎	映画時評 映画統制の弁 影なき男・批評家断罪 P・C・Lと成瀬監督	p154～155	
松田解子	最近の詩（詩壇時評）	p156～160	

	新刊紹介 「行動主義文学論」 小松清著	p160	
	原稿募集	p161	
貴司山治	芸術内の芸術大衆化論—文学大衆化論の再三提唱—（2）	p162～169	
水村宏一	文化防衛国際作家会議	p170～175	
渡辺順三	編輯後記	p176	

**第2巻第11号 昭和10年（1935）10月増大号 1日発行**

上田進	おちかを廻つて	p2～37	創作三篇
蓮見大作	す 簀（一幕）	p38～55	創作三篇 戯曲
藤島まき	汚辱の中	p56～87	創作三篇
イ・ヌシノフ （山村房次訳）	社会主義的リアリズムと心理主義的表示	p88～93	
壺井繁治	文芸時評	p94～100	
橋本英吉	読んだものから	p101～105	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p106～107	
若林つや	瀬戸の潮流	p108～110	随筆
若杉鳥子	病院の夏	p110～112	随筆
徳永（直）	書簡（渡辺大兄へ）	p112	
山田清三郎	千葉便り	p113～113	
萩原中	偶然文学論への応酬	p114～120	
佐々木一夫	橋本、鈴木の論争に就て—新しきタイプの創造が重点—	p121～124	
蘇木誠一郎	農民文学に関する若干の感想	p124～129	
熊王徳平	山梨文学状勢報告—「前哨」から「郷土」迄—	p130～133	
小名木綱夫	工場文学について	p134～135	批判と主張
藤田篤磨	長篇「炭坑」を評す	p135～136	批判と主張
斉藤慎一	「冬枯れ」より—「リアリストへの道」のノートから—	p137～138	批判と主張
谷英三	主張と批判の継承を含めて	p138～139	批判と主張

吉田一夫	プロ文学と行動主義一文評七月の小松氏の論文を中心にー	p140～141	批判と主張
	選外	p141	批判と主張
窪川鶴次郎	岩松淳の個人展覧会	p142～142	
「文学評論」編集部	第二回応募原稿について	p143～143	
葉山嘉樹	報告と提唱	p144～147	
平林たい子	林さんの提唱について	p147～148	
片田詮二	『今日様』出版記念会	p149～149	
芥巖太郎	映画時評 総合的映画雑誌を望む 色彩をえた映画「虚栄の市」 映 画の題材貧困	p150～151	
金親清	創作的論争のために敢て弓を鳴らす (主として亀井勝一郎氏に)	p152～162	
十返一	プロレタリア文学に対する能動精神の立場	p163～165	
岩松淳	美術界の或る日の展望	p166～167	
岩松淳画	美術界の展望 (* 絵)	p168～169	
相馬泰三	農村に於ける階級構成と農民の心理 (承前) —シヨーロホフの「ひらかれた処女地」並びにパンフヨーロフの「或るコンミュニンの悲劇」その他を読むー	p170～177	
本庄陸男	故郷の歌ー平田小六氏の「童児」に就いてー	p178～181	相互批評
平田小六	作家の表情ー本庄陸男と「白い壁」についてー	p181～182	相互批評
	新刊紹介「正岡子規研究」宮田戊子著	p182	
佐々木孝丸	アンリ・バルビュスに就て	p183～188	
森山啓	作家の世界観における ー問題としての「必然」と「偶然」ー「偶然論者墓碑銘」よりー	p189～198	
秋田雨雀	五十年生活年譜 (完結) XI 逆流時代 (昭和七年～八年)	p199～206	
	編輯後記	p207	

第2巻第12号 昭和10年 (1935) 11月倍大号 1日発行

徳永直	弱虫	p2～9	創作四篇
-----	----	------	------

陸中巖	馳	p10~19	創作四篇
木村清治	父と子	p20~47	創作四篇
平林彪吾	早産	p48~64	創作四篇
窪川鶴次郎	プロレタリア文学運動とその形態 —続「一九三四年度プロレタリア文学の展望に関して」—	p65~74	
小名木綱夫	欠食児とインフレ末期	p75~77	文学通信 村の生活・町の生活
三谷秀治	風害地区	p77~78	文学通信 村の生活・町の生活
銘康夫	モスリン工場を周つて	p78~79	文学通信 村の生活・町の生活
谷英三	女学生が工場へ参観にきた	p79~81	文学通信 村の生活・町の生活
	選外	p81	文学通信 村の生活・町の生活
	職場スケッチ募集	p81	文学通信 村の生活・町の生活
ア・アブラモフ (馬上義太郎訳)	「太陽のない街」を批判する	p82~83	
	文壇茶呑み話	p84~85	
高倉テル	農民文学の意義、任務	p86~94	
今野久子	夫の死に面して	p95~95	詩
壺井繁治	<sup>しもべ</sup> 神の下僕の営むマリヤ病院	p96~102	長篇諷刺詩
岡邦雄	新刊紹介 中野重治「論議と小品」	p103~103	
唯物亭弁証坊	遠視近視	p104~105	
高橋喜惣勝	文学に於ける大衆性の問題	p106~108	批判と主張
高梨清次	店員の文学に就いて	p108~109	批判と主張
滋田一衛	文学大衆化の問題	p109~111	批判と主張
宮井一夫	金親清氏の態度	p111~113	批判と主張
	「読者ハガキ便り」新設	p113	批判と主張
	「批判と主張」選外	p113	批判と主張
	締切後到着	p113	批判と主張
S・T生	「小林多喜二書簡集」を読みて	p114~115	

川口浩	最近の長篇小説—現代プロレタリア文学論（一）—	p116～123	
槇本楠郎	日本童話界の現状	p124～127	
	トルストイ二十五周年報告祭	p128～129	
雨雀生	弘前文芸座談会	p128～129	
秋田雨雀	トルストイの死後二十五年祭について（文学通信）	p130～132	
壺井繁治	新刊紹介 「ソヴェト刑務所」物語を読んで	p133～133	
加藤悦郎	カリカチュア 秋田雨雀 藤森成吉	p134～135	
楊達	台湾文壇の近情	p136～139	
ワルワラ・ブブノワ （広尾猛訳）	岩松氏の個展について—同僚的批評の試み—	p140～143	
『文学評論』編集部	文学評論賞の設定について	p144～145	
窪川鶴次郎	作家クラブに就いての私の感想	p146～149	
エヌ・ピクサノフ	ゴリキイ研究	p150～160	
神庭与作	三代の分割（一幕）	p162～176	第二回原稿応募 入選発表 戯曲
秋田雨雀 三好十郎 村山知義	「三代の分割」選評	p176	第二回原稿応募 入選発表
左右田謙	若い歩み—銀行員日記—	p177～196	第二回原稿応募 入選発表 小説
	応募小説予選	p196	第二回原稿応募 入選発表
藤川すみ子	電鍵	p197～218	第二回原稿応募 入選発表 小説
	詩選外佳作	p218	第二回原稿応募 入選発表
高木光	血	p219～236	第二回原稿応募 入選発表 小説
	応募詩佳作	p236	第二回原稿応募 入選発表
佐伯二郎	良心	p237～253	第二回原稿応募 入選発表 小説
鄭遇尚	声	p254～269	第二回原稿応募 入選発表 小説
	短歌選外佳作	p269	第二回原稿応募 入選発表
南龍夫	社会主義リアリズム確立のために	p270～276	第二回原稿応募 入選発表 評論
船方一	朝 =私をめぐる風影のひとつ=	p277～279	第二回原稿応募 入選発表 詩
奥津兼一郎	老いたる感慨	p279～281	第二回原稿応募 入選発表 詩

河上伴三	おれにも歌はせてくれ！	p281～283	第二回原稿応募 入選発表 詩
野田一良	これは本当に良いことだ	p283～285	第二回原稿応募 入選発表 詩
木村砂多夫	鋤かけ	p286～286	第二回原稿応募 入選発表 短歌
小名木綱夫	小さな町から	p286～286	第二回原稿応募 入選発表 短歌
柵木左衛	社長の訓示	p287～287	第二回原稿応募 入選発表 短歌
蠣崎稻男	この現実	p287～287	第二回原稿応募 入選発表 短歌
新井徹 上野壮夫 松田解子 北川冬彦 窪川鶴次郎 森山啓	応募詩選後評	p288～296	応募原稿選後評
中野重治 窪川鶴次郎 川口浩 森山啓	論文選後評	p296～299	応募原稿選後評
秋田雨雀 三好十郎 村山知義	戯曲選外佳作評	p299～300	応募原稿選後評
矢代東村 坪野哲久 渡辺順三	短歌選後評	p300～301	応募原稿選後評
今村恒夫を援助する会	今村君のことにつき	p285	
	編輯後記	p302	
<b>第2巻第13号 昭和10年（1935）十二月号 1日発行</b>			
本庄陸男	水の上	p2～24	創作三篇
竹内昌平	幹部	p25～55	創作三篇
田中耕二	戦慄	p56～82	創作三篇
徳永直	労働者作家の擡頭	p83～95	三五年度の総批判と三六年度への展望
村山知義	戯曲界の総批判と展望	p95～102	三五年度の総批判と三六年度への展望
上野壮夫	詩の一年をかへりみる－叙事詩・諷刺詩など－	p102～107	三五年度の総批判と三六年度への展望
森山啓	年末所感	p108～113	三五年度の総批判と三六年度への展望
	文壇茶呑み話	p114～115	
プーシキン（上田進訳注）	十二月党員を歌った詩二つ	p116～118	

佐田四郎	第三部会展批評—二科会との対比によつて—	p119~121	
窪川稲子	映画時評 映画の魅力 「西班牙狂想曲」と「沐浴」の相違 「ワルツ合戦」の乏しさ 記録映画について	p122~123	
貴司山治	芸術外の芸術大衆化論 —文学大衆化論の再三提起—	p124~130	
鶴彬	川柳レアリズムに就いて	p131~133	
鶴彬 瀬木正維	川柳	p133~133	
赤星白光	島木、森山の「文学界」参加	p134~135	
島木健作	高倉テルの批評について	p136~143	
	一九三六年新年号創刊 「新文学」発刊の趣旨と会友募集	p143	
藤沢桓夫 徳永直 無名氏 林房雄 貴司山治 田辺耕一郎 舟橋聖一 加賀耿二 村山知義 橋本英吉 平林たい子 荒木巍 葉山嘉樹 亀井勝一郎 青野季吉 藤森成吉 立野信之 平林彪吾 江口渙 本庄陸男 島木健作 平田小六 松田解子 湯浅克衛 川口浩 窪川稲子 細田民樹 窪川鶴次郎 森山啓	今年度の作品と新人	p144~147	
栗林一石路	夏草と子供たち	p148~148	俳句作品
横山林二	こほろぎ	p148~149	俳句作品
橋本夢道	故郷	p149~149	俳句作品
清内路二	マイクロホン	p149~149	俳句作品

混迷人	俺らの夏	p150～150	俳句作品
藤田港	濁流	p150～150	俳句作品
徳保秋人	獄窓だより	p151～151	俳句作品
永見達	獄その他	p151～151	俳句作品
一読者 夢野通路 正木生 桑原生 石川忍 立花一平	ハガキ論壇	p148～151	
呑気放亭	遠視近視	p152～153	
小名木綱夫	平明の辞一及び長篇に寄せて一	p154～155	批判と主張
三島明	「批評の大衆化」異議なし一批評の二元論的傾向について一	p156～157	批判と主張
島田照夫	一つの立場から	p157～159	批判と主張
金子二郎	藤川君の「電鍵」に添へて	p159～160	批判と主張
文田耕二	墓穴を堀る能動精神	p160～161	批判と主張
	『批評と主張』選外	p161	批判と主張
川口浩	最近の長篇小説（承前）	p162～165	
	シヨーロホフと語る（三月十日イズヴエスチャ紙より）	p166～170	
	林房雄氏出獄歓迎会	p171～171	
山田清三郎	千葉だより	p172～173	
野地謙次	素描（その一）	p174～175	応募詩選外佳作
東達夫	<sup>あぶらび</sup> 「油火」	p175～176	応募詩選外佳作
八幡黎二	うどん	p176～176	応募詩選外佳作
内田博	肉体の歌＝肉体こそ最も高い精神である＝	p176～177	応募詩選外佳作
谷川真砂瑠	兄さんよ	p177～177	応募詩選外佳作
窪木信三郎	新らしい展望について	p177～178	応募詩選外佳作
小倉京二	<sup>まど</sup> 窓	p178～179	応募詩選外佳作
中野重治	今村恒夫の病気のこと	p180～181	
エヌ・ピクサノフ （馬上義太郎訳）	ゴリキイ研究（二）	p182～187	

	編輯後記	p189	
<b>第3巻第1号 昭和11年（1936）新年号 1日発行</b>			
藤森成吉	長英の行きかた	p2～26	創作四篇
岩藤雪夫	工場にもどつて	p27～47	創作四篇
大元清二郎	旋盤工	p48～66	創作四篇
徳永直	黎明期（長篇小説）（第一回）－第二部－	p67～94	創作四篇
立野信之	年頭所感（文芸時評）－主として本庄・橋本の二作家に就て－	p95～100	
	新刊紹介 アリエル（シエリイの生涯） 山室静訳	p100	
呑気放亭記 小野沢巨画	勇敢なる兵卒シユベイクの文壇突撃	p102～105	漫画と漫文
長谷川一郎	リアリズム強化のために	p106～111	
森山啓	僕の「文学界」入りについて－文学雑誌の同人たることの意義－	p112～117	
プーシキン（上田進訳注）	チャアダエフに	p118～119	詩
大滝重直	農民文学の再建	p120～125	
葉山嘉樹	アメリカからの反響	p126～127	
	「文学評論賞」審査員	p127～127	
本庄陸男	作家同盟ありし頃	p128～129	
上野壮夫	戦旗華やかなりし頃	p129～131	
	「独立作家クラブ」設立趣意書	p131～131	
千金貫事	美術運動の方向と、社会主義リアリズムに関して	p132～133	
竹内次郎	作家と言語の問題	p134～136	批判と主張
熊王徳平	藤沢桓夫と武田麟太郎	p136～137	批判と主張
斉藤鉄人	<sup>タイプ</sup> 新らしき労働者群の擡頭	p138～139	批判と主張
島田照夫	社会主義リアリズムの問題－南龍夫氏への感想として	p139～141	批判と主張
新郷学	国字（主として仮名文字）の正しき統一について	p141～143	批判と主張
	「批判と主張」選外	p143	批判と主張
	締切後到着	p143	批判と主張

	原稿募集規定	p143～143	批判と主張
京浜国道	遠視近視	p144～145	
新居広治	津軽の漁師たち	p146～149	絵と詩
金子和	現代小説に映じた朝鮮的現実—張赫宙論—	p150～157	
朴勝極	朝鮮と文学—一九三五年文壇の回顧—	p158～161	
	文壇茶呑み話	p162～163	
川崎大治	槇本楠郎の歴史的位 置—童話集「仔猫の裁判」をめぐりて—	p164～167	
秋田雨雀 青野季吉 中野重治	ナウカ社版ゴリキイ「文学論」読後感	p167	
川口浩	最近の長篇小説（承前）	p168～171	
小熊秀雄	ツオイスの双生児 シルレルとゲーテのこと	p172～176	
土方定一	ドイツ文学通信	p177～179	
高倉テル 齊藤一 大井良 風見牡鶏 窪木信三郎 高尾ガン 保坂生 杉浦初 梶川生 立花一平	ハガキ論壇	p180～181	
片岡鉄兵	若い歩みの作者		入選小説選評
窪川稲子	選後評		入選小説選評
貴司山治	高木光君の「血」について		入選小説選評
徳永直	「電鍵」について		入選小説選評
立野信之	「声」について		入選小説選評
	編輯後記	p187	
<b>第3巻第2号 昭和11年（1936年）2月号 1日発行</b>			
橋本英吉	共同耕作	p2～16	
入江生 新郷悟	ハガキ論壇	p16～16	
大江賢次	朝やけ	p17～36	

大元清二郎	旋盤工（二）	p37～52	
徳永直	黎明期（長篇小説）（第二回）－第二部－	p53～61	
鹿地亘	最初の印象記	p62～67	プロ文学の新方向を求めて（一）
鈴木亮	へたばつた小説その他	p67～73	プロ文学の新方向を求めて（一）
徳永直	島木の作風について	p73～79	プロ文学の新方向を求めて（一）
	「職場のスケッチ」選外 締切後到着	p79	
	「批判と主張」選外	p79	
大江満雄	ベーリング海峡－詩人、作家たちに－	p80～81	詩六篇
橋本正一	鉄砲と詩	p81～82	詩六篇
田中英士	少女の唄	p82～83	詩六篇
永見達	現在の唄	p83～84	詩六篇
坂井清子	足羽川	p85～86	詩六篇
中野鈴子	春	p86～88	詩六篇
	「仔猫の裁判」出版記念会	p89～89	
京浜国道	遠視近視	p90～91	
林房雄	文芸時評	p92～99	
森山啓	『真実』の問題における ゴリキイとジイドその他	p100～106	
呑気放亭記 小野沢亘画	勇敢なる兵卒シュベイクの文壇突撃	p107～109	
渡辺順三	小林多喜二逝きて四年 その遺族を訪ふ	p110～111	
葉山嘉樹	たい子女史について－「悲しき愛情」を読みて－	p112～113	相互批評
平林たい子	葉山さんの人と小説	p113～115	相互批評
後藤順一郎	鉄の街	p116～119	職場スケッチ
宮井一夫	江東大島町	p119～121	職場スケッチ
	文壇茶呑み話	p122～123	
金子和	張赫宙論－現代小説に映じた朝鮮的現実（二）－	p124～131	
井東繁	芸術・文学における反ファシズム統一戦線の確立について －長谷川一郎氏、赤星白光氏への批判を兼ねて－	p132～134	批判と主張
福島和人	貧困の文学	p134～135	批判と主張

滋田一衛	貴司氏の「大衆化論」	p136～137	批判と主張
	原稿募集規定	p137	
ハインリヒ・ハイネ (窪川鶴次郎 中野重治訳)	フランスの状態 (一)	p138～141	
エヌ・ピクサノフ (馬上義太郎訳)	ゴリキイ研究 (三)	p142～149	
外村史郎	ソヴェト文学ニュース (十一月一日から十二月二十日まで一三五年)	p150～152	
	長篇小説応募者発表	p152	
上島清	農夫		文評・詩壇 (佳作)
真鍋勝見	糲摺		文評・詩壇 (佳作)
永井正義	密集するもの		文評・詩壇 (佳作)
片尼清	油堀		文評・詩壇 (佳作)
関直夫	新世紀を	p155	文評・詩壇 (佳作)
渡辺順三	編輯後記	p156	
	文学評論賞第一回締切り近づく すべての読者、作家、批評家、同人雑誌同人諸君に！	p157～157	

### 第3巻第3号 昭和11年 (1936) 3月号 2周年記念特輯 1日発行

徳永直	家を建てた	2～3	二周年記念のための随筆
橋本英吉	仕事のブレーキ	3～4	二周年記念のための随筆
松井圭子	家の窓から	4～5	二周年記念のための随筆
森山啓	無題	5～7	二周年記念のための随筆
島木健作	私事	7～8	二周年記念のための随筆
中野重治	僕のラヂオ	9～10	二周年記念のための随筆
藤森成吉	歴史小説のこと	10～11	二周年記念のための随筆
武田麟太郎	二周年記念会 テーブル・スピーチの筆記	12～13	二周年記念のための随筆
窪川稲子	かあちやんの兵隊さん	13～13	二周年記念のための随筆
加賀耿二	或る平凡な話	14～36	創作三篇

藤島まき	小作三反	37～51	創作三篇
徳永直	黎明期（長篇小説）（第三回）－第二部第一章－	52～67	創作三篇
岡邦雄	通俗文学と純文学その他	68～74	
林房雄	文芸時評	75～79	
	文壇茶呑み話	80～81	
和田節子 河村妙子 清野春子 高野芳江 山田たか子 斉藤信吉 松田解子 傍聴者 A（作家） 傍聴者 B（評論家） 渡辺順三	働く婦人座談会	82～88	
	新刊紹介 「一九三五年詩集」「コスモス第一集」	p88	
本庄陸男	「人民文庫」のこと	89～91	新雑誌創刊の抱負
橋本正一	「新文学」派の立場 <small>グループ</small>	91～94	新雑誌創刊の抱負
田辺耕一郎	時代をつくる「現実」の立場	95～97	
青江龍樹	薄明に歌ふ	98～98	短歌
速水惣一郎	同窓会名簿	99～99	短歌
新島繁	叙事詩 或る三月の思ひ出	100～102	
山木一郎	ラヂオ時評	103～105	
青野季吉	日本ペン倶楽部とプロレタリア作家	106～109	
北条和夫 悪口三郎 五天生	ハガキ論壇	p109	
間宮茂輔	提案者として	110～111	独立作家クラブへの希望
松田解子	独立作家クラブに望むこと	111～112	独立作家クラブへの希望
新田潤	独立作家クラブに何を望むか	112～113	独立作家クラブへの希望
橋本英吉	クラブについて	113～114	独立作家クラブへの希望
島木健作	独立作家クラブの問題	114～115	独立作家クラブへの希望

外村史郎	ソヴェト文学ニュース (十二月二十一日から一月二十日まで)	116~117	
山村房次	ソ作家同盟理事会 第三回プレナムの前夜	118~122	
	新劇の動き 新協劇団 新築地劇団	p122	
中野重治	ある日の感想	124~132	
新郷悟	「批判と主張」欄の意義	133~135	
後藤順一郎	工場文学について	136~137	批判と主張
斉藤鉄人	文学大衆化の実践過程	137~139	批判と主張
三島明 川口浩	農民文学に於ける方言の問題	139~141	批判と主張
ボリス・ソコロフ (竹内次郎訳)	日本プロレタリア美術のスタイルについて	142~143	
合点承知之助	遠視近視	144~145	
島田和夫	典型的性格の創造へー私自身への鞭としてー	146~151	プロ文学の新方向を求めて(二)
沙和宋一	考へてゐること二三	151~154	プロ文学の新方向を求めて(二)
窪川鶴次郎	新段階と文学評論賞ー分つたやうで分らないことをはつきりさせる為にー	154~156	プロ文学の新方向を求めて(二)
徳永直	映画「人生劇場」を観る	157~157	
宮田戊子	詩における新定型について	158~161	
呑気放亭記 小野沢亘画	シュベイクの文壇突撃	162~163	
中村雅男	現在におけるブル演劇とプロ演劇	164~165	
文評編集部	ロシア革命後に出版されたトルストイの著作しらべ 一九一七年ー一九三五年	166~167	
鹿地亘	上海通信(第一回)	168~174	
楊達	文評賞審査委員諸氏に与う	168~173	
	エスペラントのイエについて	p174	
窪川鶴次郎	芸術的方法と世界観の問題	175~181	
金子光晴	中野重治詩集読後	182~183	新刊批評
徳永直	「辛抱ぶよき者へ」ー詩集・松田解子著ー	183~184	新刊批評
藤森成吉	向日葵之書をよむ	184~185	新刊批評
渡辺順三	藤森氏の「渡辺華山」	185~185	新刊批評

## 第3巻第4号 昭和11年（1936）4月号 1日発行

間宮茂輔	母	p2～13	創作三篇
島田和夫	漁火	p14～31	創作三篇
徳永直	黎明期（長篇小説）（第四回）－第二部第二章－	p32～38	創作三篇
ロマン・ローラン （杉本良吉訳）	クラムシーモスクワ （ソヴェート作家同盟機関誌「文学新聞」への特別寄稿）	p39～43	
秋田雨雀	啄木の詩について	p44～47	石川啄木死后二十五年記念特輯
坪野哲久	啄本短歌の大衆性	p47～53	石川啄木死后二十五年記念特輯
池田寿夫	啄木の小説と評論	p53～58	石川啄木死后二十五年記念特輯
林房雄	文芸時評	p59～63	
橋本英吉	横光利一氏の一つの見方	p64～69	
鈴木唯一 竹内生	ハガキ論壇	p69～69	
中野鈴子	心は愛に満ちている	p70～71	詩
杉沼秀七	悲しみのうた	p72～73	詩
徳保秋人	防空演習	p73～75	詩
大道寺浩一	童心変化	p75～75	詩
乃代恒次	社会主義的リアリズムへの道－覚え書として－	p76～80	プロ文学の新方向を求めて（三）
治田一	逆立せる「社会主義的リアリズム」	p80～85	プロ文学の新方向を求めて（三）
新郷悟	片翼のリアリズム－「血の鶴嘴」を例として	p85～89	プロ文学の新方向を求めて（三）
外村史郎	ソヴェト文学ニュース（一月二十一日から二月十四日まで）	p90～93	
徳永直	「職場スケッチ」についての感想	p94～96	
那珂孝平	闘ひ主張する感想	p97～99	
山木一郎	ラヂオ時評	p100～101	
中野重治	クラブへの希望	p102～105	
鹿地亘	上海通信（その二）－魯迅氏と中国文化運動の今日－	p106～111	

合点承知之助	遠視近視	p112~113	
貴司山治	桐の木	p114~115	二週年記念のための随筆
立野信之	仕事メモ	p115~116	二週年記念のための随筆
川口浩	読書余録	p116~117	二週年記念のための随筆
林房雄	「文学評論」に望む	p117~118	二週年記念のための随筆
窪川鶴次郎	この頃もらつた手紙	p118~120	二週年記念のための随筆
一条郁	「文学評論賞」に対し一労働者より	p120	
杉本良吉	「野鴨」上演について一つの疑惑	p121~123	
	新築地一九三六年のスケジュール	p122~123	
E・S	モスクワたより	p123~123	
立野信之	「長篇小説刊行会」の仕事をはじめるに就て一本誌読者にお願ひー	p124~125	
森山啓	早春雑記	p126~129	
	原稿募集規定	p129	
	文壇茶のみ話	p130~131	
渡辺順三	日活映画「情熱の詩人啄木」を観る	p132~133	
広尾猛訳	トルストイ・文学について (一)	p134~136	
ア・スルコフ (山村房次訳)	ソヴェト詩について	p137~141	
石川正雄編	石川啄木著作年表	p142~146	
	文学評論賞第一回締切り今月末 すべての読者、作家、批評家、同人雑誌同人諸君に！	p147	
野村康	夜勤 (入選)	p148~150	文評詩壇
赤堀清太郎	静岡の火鉢 (入選)	p150~151	文評詩壇
片田一	冬によせて (佳作)	p151~152	文評詩壇
戸田繁	亡きH・Aへ (佳作)	p152	文評詩壇
	文評詩壇選外	p152	文評詩壇
	短歌選外佳作	p152	文評詩壇
福島和人	鉄路に唄ふ (入選)	p153	文評歌壇

木村砂多夫	中村川改良工事（佳作）	p153	文評歌壇
山笠草平	現実の破片	p153～154	文評歌壇
橋本道夫	朝鮮のうた	p154	文評歌壇
岡村浄一郎	横殴ぐる雪	p154	文評歌壇
大井良	浅春抄	p154	文評歌壇
河野かずを	広告気球	p154	文評歌壇
	編輯後記	p155	

### 第3巻第5号 昭和11年（1936）5月号 1日発行

立野信之	流れ（長篇小説）（第一回）－第二部第一章－	p2～13	創作三篇
宮川玄	藁	p14～28	創作三篇
浅井花子	地下道の春	p29～50	創作三篇
広尾猛訳	トルストイ・文学について（二）	p51～57	
	★全読者大衆の参加を希望する！	p58～59	第一回「文学評論」賞候補作品推薦のために
一交通労働者	「文学評論賞」を支持する	p59～59	第一回「文学評論」賞候補作品推薦のために
新島繁	芸術についての断想（・世界観と創作方法の問題・社会主義的リアリズムと……的ロマンチシズムの問題、など）	p60～69	
山木一郎	ラヂオ時評	p70～71	
松本正雄	藏原惟人の一面－下宿人としての彼－	p72～79	
壺井繁治	咳	p80～84	詩
金龍濟	春は夢から	p84～88	詩
鹿地亘	みぞれふる夕に	p88～89	詩
ア・スルコフ （山村房次訳）	詩における社会主義的リアリズム	p90～94	
竹内次郎訳	ソヴェートの文学愛好者からの手紙	p94～95	
竹内次郎訳	徳永によろしく！－ハリコフの建築技師からの便り－	p95	

	文壇茶のみ話	p96～97	
平八郎	島木健作「一つの転機」批判—われわれの問題として—	p98～106	
一読者 江東倶楽部一会員 治田一	ハガキ論壇	p106～106	
川崎大治	童話作家坪田譲治の現実	p107～111	
合点承知之助	遠規近視	p112～113	
江口渙	文芸時評	p114～120	
中野重治	小説「一つのタイプ」について—作者徳永への私信として—	p121～126	
E・S	モスクワたより	p127～127	
寺田健	「共同耕作」に就て	p128～129	批判と主張
龍田裕一	中野重治についての小論	p129～130	批判と主張
福島和人	地主について—主として農民小説に対する感想—	p130～132	批判と主張
	「批判と主張」選外	p132	批判と主張
葉山嘉樹	どつちが馬鹿か？	p134～136	随筆
徳永直	農家での十日間	p136～139	随筆
	「村の生活・町的生活」欄復活について	p139	
平林たい子	メーデーの思ひ出	p140～142	
松田解子	今年のメーデーに就て	p142～144	
窪川鶴次郎	去年のメーデー	p144～145	
三谷秀治	関西作家クラブのことなど—大阪報告—	p146～147	
エヌ・ピクサノフ (馬上義太郎訳)	ゴリキイ研究 (四)	p148～156	
渡辺順三	編輯後記	p157	

エヌ・オストロフスキイ (杉本良吉訳*) *本文、目次には訳者名は書かれていないが、次号の第二章、および同書単行本の近刊予告により、杉本良吉とみなした。	鋼鉄はいかに鍛へられたか 第一章	p2~17	
浅井花子	地下道の春 (二)	p18~37	
宮西豊逸	三日坊主	p38~54	
立野信之	流れ (長篇小説) (第二部) - 2 - 第一章	p55~64	
鹿地亘	上海通信 (その三)	p65~71	
	「ゲーテ論攷」 黒田辰男訳編	p71	新刊紹介
	「父啄木を語る」 石川正雄著		新刊紹介
杉山英樹	文学的真実について	p72~79	
山田清三郎	千葉だより	p80~83	
運転手九名 婦人車掌五名 渡辺順三 窪川鶴太郎	大阪市バス従業員と文学を語る座談会	p84~89	
間宮茂輔	文芸時評-作品評を主として-	p90~97	
合点承知之助	遠視近視	p98~99	
玉城肇	文学者の自殺について-主として杉山平助氏の所説の批判-	p100~103	
笈清	「職場スケッチ」欄について-併せて文学上のスケッチについて-	p104~108	
	原稿募集規定	p108	
湯浅克衛	心田開発-朝鮮新風景-	p109~115	
	文壇茶のみ話	p116~117	
平八郎	金龍濟の詩-現実に生きる文学者の態度-	p118~121	
	詩人クラブ報告	p121	
山本一郎	ラヂオ時評	p122~123	
青野季吉	文学評論賞について	p124~126	
	編集部より	p126	

杉本良吉	「洋学年代記」をみる	p127～129	
	新刊紹介 「マルチンの罪」 蔵原惟人、杉本良吉 共訳	p129	
杉山平一	映画時評	p130～131	
エル・スパコイヌウイ (山村房次訳)	世界観と芸術方法について	p132～135	
ゲ・イゾトフ (竹内次郎訳)	文学勉強の基礎 (一)	p136～143	
朴永浦	青いチヨツキ (入賞)	p144～146	文評詩壇
山口英助	忍苦の魂 (佳作)	p146～147	文評詩壇
吉原重雄	釜場の芳の話 (佳作)	p147	文評詩壇
堀奎二	<sup>げ</sup> 雪解の夜 (佳作)	p147～148	文評詩壇
峰逸治	新鮮な旗を	p148	文評詩壇
	選外佳作		文評詩壇
	第三回原稿募集	p149	
	編輯後記	p150	

### 第3巻第7号 昭和11年 (1936) 7月号 1日発行

エヌ・オストロフスキイ (杉本良吉訳)	鋼鉄はいかに鍛へられたか 第二章	p2～17	創作四篇
沙和宋一	雪の記録—「肅正選挙」一週間—	p18～33	創作四篇
志木守豪	馬鹿野郎	p34～43	創作四篇
立野信之	流れ (長篇小説) (第二部) — 3 — 第一章	p44～50	創作四篇
編集部	ゴリキイ病む	p52～52	
エヌ・ピクサノフ	ゴリキイ研究 (五)	p53～59	
合点承知之助	遠視近視	p60～61	
徳永直	文芸時評	p62～67	
金龍濟	「地下道の春」について	p68～71	

山本一郎	ラヂオ時評	p72～73	
後藤順一郎	「就職志願者」	p74～77	職場スケッチ
町田圭子	社員秋季慰安会	p77～80	職場スケッチ
飛田健三	灰色の空の如く	p80～81	職場スケッチ
	「職場スケッチ入選」	p81	職場スケッチ
世田三郎	江戸滑稽文学の一考察 下層町人のイデオログとしての式亭三馬	p82～87	
伊藤信吉	十二月のプーシキン	p88～92	
水野茂知也 池本修二 巽幸作 寺島博 森田伍郎 K生 青山留三 竹内次郎	ハガキ論壇	p92～93	
今村大平	映画時評 「幽霊西へ行く」 その他	p94～95	
森山啓	主観的作家	p96～101	
	「文学評論賞によせて」	p101～101	
	「文学評論賞」審査の経過について	p101～101	
上野壮夫	同人雑誌の作品に就いてー「逞しさ」への要求などー	p102～106	
魯迅	春末閒談	p107～111	隨筆
鹿地亘	「春末閒談」について	p111	
宮本顕治	書簡 市ヶ谷より（金龍濟へ）	p111～111	
	文壇茶のみ話	p112～113	
宮田保郎	言論の統制は文化を衰退させる	p114～116	
	第三回原稿募集	p117	
ハインリヒ・ハイネ （中野重治 窪川鶴次郎 金子和訳）	フランスの状態（二）	8～123,127～127	
打木村治	「同人雑誌クラブ」の問題ーその覚書の報告書	p124～127	
A・シチエルバコフ （馬上義太郎訳）	ソヴェト文学の諸問題ー文学論争の結果ー	p128～133	
	「全モスクワ作家会議」の討論について	p133	

古賀ユキ	「或る平凡な話」に於ける偶然	p134～135	批判と主張
野上清	翻訳文章の不安について	p135～137	批判と主張
小名木綱夫	「集団行進」の示唆に就いて	p137～139	批判と主張
	「批判と主張」選外	p139	批判と主張
ゲ・イゾドフ (竹内次郎訳)	文学勉強の基礎 (二)	p140～147	
	原稿募集規定	p147	
砂木宗治	山西省！ (入賞)	p148	文評歌壇
畑あき子	桜 (入賞)	p148	文評歌壇
大塚吉治	点検 (入賞)	p148～149	文評歌壇
小名木綱夫	施料室の窓	p149	文評歌壇
福島和人	故里の煤煙に寄せて	p149	文評歌壇
山埜草平	ある日の市街	p149	文評歌壇
西山研一	逃げる	p150	文評歌壇
佐々木録太郎	雑詠	p150	文評歌壇
木村砂多夫	休業した製材所	p150	文評歌壇
宮西直輝	三六年の春を歌ふ	p150	文評歌壇
	選外佳作	p150	文評歌壇
聯盟書記局 (アラゴン、ア・シ ヤムソン、ジー・エル・ブロッ ク、ア・マルロー)	国際文化擁護作家聯盟より日本の作家へ	p151～151	
	百科全書編纂原案	p152～153	
	国際文化擁護作家聯盟規約	p153～154	
	編輯後記	p155	
<b>第3巻第8号 昭和11年 (1936) 8月号 ゴリキイ哀悼* 1日発行</b>			
*本号の表紙には、「ゴリキイ追悼」とあるが、ここでは、とびらと目次の「ゴリキイ哀悼」を採録した。			
	口絵 ゴリキイ写真集		
「文学評論」編集部	哀悼の辞	p2～2	

	棺側の記（六月二〇日プラウダより）	p3～8	
	赤き広場の葬儀（六月二〇日プラウダより）	p9～12	
文評編集部	ゴリキイ葬儀委員会より	p12	
	ゴリキイの死と全世界からの弔辞（六月二〇日プラウダ）	p3～5	
	各国作家からの弔電（六月二〇日プラウダ）	p5～7	
	各国新聞に現はれた反響（六月二〇日プラウダ）	p7～12	
エム・コンチャロフスキイ博士	よく規律を守る患者であったゴリキイ	p13	ゴリキイの最後
ア・スペランスキイ博士	重態の中で「憲法草案」を口ずさむゴリキイ	p14～15	ゴリキイの最後
レウイン博士	百歳までも生かしかつた	p15～16	ゴリキイの最後
イ・ヴェ・ダヴィドフスキイ	ゴリキイ解剖の結果	p16	ゴリキイの最後
	ゴリキイの脳の研究	p16	ゴリキイの最後
	ロマン・ローランの弔辞	p17～18	ゴリキイの死を悼む三文豪
	バーナード・ショウの弔辞	p18～19	ゴリキイの死を悼む三文豪
	アンドレ・ジイドの弔文	p19	ゴリキイの死を悼む三文豪
N・クルプスカヤ	ゴリキイとレニン	p20～22	
ステツキイ （馬上義太郎訳）	ゴリキイの文学活動四十年	p23～33	
	全ソヴェトに氾濫するゴリキイの名	p33	
エム・ゴリキイ （横田瑞穂訳）	フョドル・ジヤージン	p34～49	小説
エム・ゴリキイ （八住利雄訳）	戯曲の創作方法	p50～65	評論
エム・ゴリキイ （広尾猛訳）	モナーキストへの手紙	p66～73	書簡
故ルナチャルスキイ （馬上義太郎訳）	民衆から出た作家ゴリキイ	p74～76	

グラトコフ (馬上義太郎訳)	ゴリキイとの最初の対面	p76～81	
ウエ・カチャロフ (馬上義太郎訳)	「どん底」を朗読したゴリキイ	p81～83	
	文壇茶のみ話	p84～85	
中野重治	ゴリキイと日本文学	p86～91	
亀井勝一郎	ゴリキイ追悼の辞	p92～99	
	統計に現はれたゴリキイに関する批評	p99	
合点承知之助	遠視近視	p100～101	
船方一 浦川鉄 斉藤鉄人 後藤順一郎 杉浦初 谷英三 武政杜郎 竹内次郎 鈴木泰治 茂呂信介 山笠草平 森平作 志賀猛 長島乾司 労働者グループ (在神戸) 堀田重樹 北村俊夫 岸本進一郎 大原宏 保険会社女事務員 労働者グループ (在神戸) 福島和人 三谷秀治	ゴリキイの死に対して文学を愛する日本の労働者の哀悼の言葉	p102～112	
吉田貞夫	ソヴェト文学ニュース	p113～115	
水野茂知也 山代信一 寺島博 山口英助 由良幾 梅木生	ハガキ論壇	p116～117	
	原稿募集規定	p117	
昇曙夢	ゴリキイの印象	p118～121	

	ゴリキイの逸話	p121	
中条百合子	マクシム・ゴリキイの風貌―彼によつて描かれた婦人―	p122～130	
鈴木亮	文芸時評	p131～137	
	ゴリキイの逸話	p137	
山本一郎	ラヂオ時評	p138～139	
徳永直 間宮茂輔 竹内昌平 小森実 志木守豪 山田たか子 渡辺順三	労働者と作家と文学を語る座談会	p140～152	
藤森成吉	民衆の恋人	p153～154	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
張赫宙	ゴリキイの明るさ	p154～155	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
上田進	さよなら、ゴリキイ！	p155～157	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
浅井花子	ゴリキイから学ぶ	p157～158	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
島田和夫	ゴリキイの爪の垢を煎じて呑まふ	p158～160	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
細野孝二郎	偉大な気魄を	p160～161	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
橋本正一	印象派的ロマンチズム	p161～162	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
沙和宋一	生活からの勉強	p163	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
池田寿夫	最大の遺産	p163～165	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉

新島繁	「ゴリキイ」についての回答	p165~167	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
上田広	あゝゴリキイ	p167	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
緑川貢	僕のゴリキイ	p167~168	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
加賀耿二	「母」におけるゴリキイの意義	p168~170	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
高見順	一言	p170~171	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
本庄陸男	好きな作品「チエルカツシュ」	p171~172	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
大元清二郎	僕の決心	p172~173	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
伊藤永之介	開拓者ゴリキイ	p173~175	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
松田解子	「四十年」について	p175~176	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
鈴木亮	纏らぬ感想	p176~177	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
藤島まき	「幼年時代」に寄せて	p177~178	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
湯浅克衛	怠惰な読者から	p178~179	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
細田民樹	地上に於ける最初の作家	p179~180	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
窪川稲子	ゴリキイ断想	p181~183	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉

江口渙	ゴリキイの顔	p183~185	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
島木健作	師ゴリキイ	p185~187	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
秋田雨雀	ゴリキイの死を悼む	p187~188	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
葉山嘉樹	ゴリキイを追慕する	p189~192	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
徳永直	ゴリキイの作品が持つ労働者性	p193~199	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
橋本英吉	ゴリキイ断想	p199~201	ゴリキイの死に対して日本の 勤労作家から贈る言葉
	ゴリキイも子供には負けた	p201	
中原冷二	映画時評	p202~203	
	ゴリキイ年譜	p204~208	
	音楽家になり損つたゴリキイ	p208	
中野重治 抜萃	彼等に行く	p210~213	ゴリキイ文学読本
	(抜萃者の言葉)	p213	ゴリキイ文学読本
亀井勝一郎 抜萃	人の誕生	p213~216	ゴリキイ文学読本
	(抜萃者の言葉)	p216	ゴリキイ文学読本
森山啓 抜萃	フオマ・ゴルテーエフ	p216~221	ゴリキイ文学読本
	(抜萃者の言葉)	p221	ゴリキイ文学読本
窪川稲子 抜萃	母	p222~231	ゴリキイ文学読本
	(抜萃者の言葉)	p231	ゴリキイ文学読本
亀井勝一郎 抜萃	トルストイの想ひ出	p231~234	ゴリキイ文学読本
	(抜萃者の言葉)	p234~235	ゴリキイ文学読本
徳永直 抜萃	幼年時代	p235~238	ゴリキイ文学読本

徳永直 抜萃	私の大学	p239～242	ゴリキイ文学読本
	(抜萃者の言葉)	p242	ゴリキイ文学読本
松田解子 抜萃	四十年	p243～252	ゴリキイ文学読本
	(抜萃者の言葉)	p253	ゴリキイ文学読本
	偽ゴリキイの横行	p253	
	神様にされたゴリキイ	p253	
渡辺順三	編輯後記	p254	